

リメディアル教育・学生支援の視点を取り入れた
基礎教育についての一考察

神戸芸術工科大学における英語教育を中心に

A THOUGHT ON THE INNOVATION OF FUNDAMENTAL EDUCATION
WITH PERSPECTIVES OF REMEDIAL EDUCATION AND STUDENTS SUPPORT
From the Viewpoint of English Education at Kobe Design University

岡村 光浩 デザイン教育研究センター 准教授

Mitsuhiro OKAMURA

Center for Design Studies, Associate Professor

要旨

本稿では、既出拙稿の流れを受け、まず前号論文以後の学内での動向や、本学学生の語学力の現状、並びに語学力及び基礎学力向上についての取り組みを整理する。

次に学部英語における末延岑生講師（総合英語・非常勤）の唱道する「ニホン英語」の思想と「フラッシュカード」を用いた英語教授法の導入可能性や、学部英語教育と大学院アカデミック・リテラシー教育との接続のあり方についても、併せて検討する。

最後に筆者の参加する社会貢献活動（成人発達障害当事者支援）等を通じて得た、学生支援にも応用可能と考えられる知見等を整理し、本学における英語教育、そして語学教育を含む基礎教育について、語学力・基礎学力の下支えと向上に留まらない、学生支援の視点を取り入れた総合的なサポート体制を確立するべきとの視点から論じる。

Summary

As the sequel to the papers published previously, this paper reports the current status of the language ability of KDU students and attempts to improve their language and basic academic skills.

Next, this paper discusses about the possibility to introduce the idea of *Nihon Eigo* (Japanese English) and teaching methods using flash cards by Prof. Mineo SUENOBU into the undergraduate English education. In addition, it discusses about the issues related to the connectivity between undergraduate English education and the Academic Literacy program in the graduate courses.

Finally, the author explains his experience as a staff member of a self-help group of adults with developmental disorders, with hope to be helpful for improving language and fundamental education and welfare supports, with hope to establish a one-stop support station for students who need help.

はじめに

2010年にプレイスメント・テストを導入し、新時代を迎えた本学の英語教育は、大学教育、とりわけ基礎教育の一環として求められる語学教育のあるべき姿と在学生の英語力（語学力）の実態のバランス、そして学生にとって有用な、あるいは興味を持って取り組める教材や教授法を求めて毎年試行錯誤を繰り返している。

2009年度本学紀要掲載の拙稿「神戸芸術工科大学における英語教育について－現状と展望」（以下「岡村2009」：URLは文末参考文献参照）においては、まず「芸工大で英語（語学）を学ぶ意味」について学生向けオリエンテーションでも説明する筆者なりの見解を述べた上で、本学開学以来の英語科開講科目の変遷を概観することで本学における英語教育に期待されるものを知る手がかりとし、「自己診断テスト」（プレイスメント・テストの試行実施版）の結果や学生・教員からのアンケート・ヒアリング等の結果を参考に、本学英語教育の現状と今後のあり方について考察すると共に、筆者の感じる「英語（語学）以前の問題」についても、事例を交えて論じた。

2010年度紀要掲載の「初年次教育・基礎教育についての一考察－神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」（以下「岡村2010」）においては、2010年度の英語科カリキュラム改訂のねらいと現状について、大学院の状況も合わせて述べると共に、学生への指導方針の手がかりとして、本学「総合英語」講師を委嘱している末延岑生講師（兵庫県立大学名誉教授）が唱道する「ニホン英語」の考え方について、その概要と授業での実践例を紹介した。また筆者が英語の授業の一環として行った企画や指導した学生の活躍などを採り上げることなどを通じて、「英語（語学）以前の問題」への全学としての取り組みの必要性につき論じた。

本稿においては、上記の流れを受け、前号論文以後の学内での動向や、これを受けての英語科並びに語学部門講師陣（専任・非常勤）や、基礎教育を担当するデザイン教育研究センター教員間での議論と、これを受けて始動したいいくつかの企画と今後の展望について述べたい。

実践例としては、末延教授の監修の下で「ニホン英語」

的発想で試作を進めている「KDUフラッシュカード（仮称）」について紹介する。併せて、大学院における英語教育とアカデミック・リテラシー教育の連携を巡る試行錯誤の現状と、大学院生主導のプロジェクトとして、「KDU大学院留学生キャンパスガイド」制作の試みについても報告する。

最後に、筆者が新たに参加した社会貢献活動である成人発達障害当事者支援と大学教育との関わりや、教育支援・学生支援にも応用可能と考えられる知見等を整理しつつ、本学における英語教育、そして語学教育を含む基礎教育について、語学力・基礎学力の下支えと向上に留まらない、学生支援の視点を採り入れた総合的なサポート体制を早急に確立するべきとの視点から論じたい。

（おことわり）

本稿における論考は、本学教職員・学生、英語科非常勤講師並びに関連学会・NPO等の会員その他のみなさまとの折々の議論を踏まえてはいるが、あくまで筆者の私見であり、神戸芸術工科大学、並びに同大学デザイン教育研究センター、発達障害をもつ大人の会(DDAC)その他、筆者が所属する組織の公式見解ではない。

また投稿締め切り期日の関係上、事実関係の記述並びにそれに基づく考察は、特段の断りがない限り2011年7月末現在のものである¹旨、あらかじめお断り申し上げます。

1 2010-11年度の英語科の現状と課題

1-1 2010-11年度英語科カリキュラムの現状

2010年度の英語科カリキュラム改訂内容の詳細については、昨年度本学紀要掲載の拙稿「初年次教育・基礎教育についての一考察」1章1～2節を参照いただきたい。

2011年度もカリキュラムの内容的には特段の変更はなく引き継がれている。すなわち、

- 基礎分野科目内に「リテラシー（語学）」部門を設け、総合英語・英語コミュニケーション・英語演習A/B/C・フランス語初級／中級・ハンゲル初級／中級・中国語初級／中級・日本語初級／中級（留学生

のみ）・日本語文章作成を開講、各2単位で8単位を選択必修とする。

- 「総合英語」及び英語以外の諸言語初級・中級についてそれぞれ「〇〇語Ⅰ・Ⅱ」半期2科目を置く「標準年型」とする。
- 「総合英語Ⅰ・Ⅱ」については、プレースメント・テストに²より上級・中級・初級の3レベルにクラス分けする。³
- 進級した学生が継続して英語を学習するよう誘導するため、「英語コミュニケーション（ネイティブスピーカーによる英会話）」「英語演習（「A:（映像教材を用いた）アートと旅行の英語」「B: 英作文・TOEICの基礎（英文法）」「C: 時事英語）」は2年次以上の履修を指定する。

1-2 2010-11年度英語科カリキュラムの運用

運用レベルでの調整として、2010年度前期は成績上位者の「歩留まり」がよく上級クラスの人数が多くなってしまったため（岡村2010: 1-2-2）後期はクラスを分割して1クラスあたりの受講者数を抑え、また2011年度前期は上級クラスへの振り分け数自体を削減して約20名での開講に対応した。

「総合英語」初級クラス（Ⅰ／Ⅱ各3コマ）については、3章のとおり末延教授に企画運営を一任する形で、末延式のリメディアル英語教育を採り入れた授業をお願いしている。

中級クラス（Ⅰ：10コマ／Ⅱ：8コマ）については、受講者数の関係上2011年度も2010年度のテキスト⁴を継続使用したため、授業内容的には大きな変更はない。

上級クラス（Ⅰ：1コマ／Ⅱ：2コマ⁵）については、クラス分け1年目の2010年度に採用した「オバマのアメリカ」を採り上げた教材⁶が、オバマ大統領自身の人気の凋落もあいまって授業アンケートで非常に不評だったため、2011年度はより幅広く社会問題を扱った教材⁷に変更した。

なお、カリキュラム外に開講されている授業として、キャリアセンターが運営するTOEIC講座も引き続き開

講されている。⁸

2 学内での議論と語学教育充実のための取り組み

2-1 外国語担当講師懇談会での議論

神戸芸術工科大学における英語教育のあり方、基礎教育における英語教育（語学教育）の位置づけについては、過去2年の拙稿でも論じてきたとおり、英語科講師陣の間で、また神戸芸術工科大学で基礎教育を担当するデザイン教育研究センターの同僚教員との懇談や教務委員会主催のFD研究会の席上などで議論を続けてきた。

2010年11月2日には、齊木崇人学長主催による外国語担当講師懇談会が開催（本務校での授業がある学外講師を除くすべての外国語科目担当教員が出席）された。

席上学長からは、20か国93名というバラエティに富む出自の留学生を擁し、38名輩出した博士学位取得者のうち20名が留学生（いずれも2010年11月現在）、また1,700名規模の私立大学としては極めて異例な、例年コンスタントに1、2名の大使館推薦国費留学生（文部科学省）等を受け入れる国際的評価の高さ、中国・台湾・韓国を中心とするアジアの諸大学をはじめ、本学も参加する世界的な芸術・デザイン・メディア系大学のコンソーシアムであるクムルス(Cumulus)⁹参加大学との交流、学長がデザイン統括監を務める神戸市が、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）創造都市ネットワーク参加都市の認定を受けた¹⁰ことをきっかけに本学も参加する機会が急増した、研究者や学生が参加する国際的なフォーラム・ワークショップ¹¹・展示会¹²等、急速な高まりを見せる本学の国際化を踏まえ、さらなる語学教育の充実のための議論を深めたいとの挨拶があり、出席者の間で活発な議論が交わされた。

プレースメント・テストによる英語クラス分けについては講師陣にも好評で、クラスごとの受講者数が減ったことにより学生に目が届きやすくなったとの意見が多かった一方で、クラス分けの後もなお基礎学力の差を意識させられる場面があるとの声も寄せられた。なお総合英語中級レベルは複数クラス・複数担当者制を採っており、前後期で担当教員が変わることも考慮して、テキストを

指定することによるコンテンツの共通化を図っているが、共通部分以外の時間の使い方は各担当講師に一任することで、担当教員の個性や教育観を授業に反映する余地を残している。これは本学のような、個性が重んじられるべき芸術系の大学における語学教育としては必要な措置であると筆者は認識しており、筆者の「時事的な話題についての海外メディアの最新報道を使った授業」、末延教授の「ニホン英語の思想を採り入れた授業」（3章を参照）のほか、「まんがを英語で説明させる授業」（長岡明講師）等が報告された。また、末延教授からは、「デザインについての教材を使うと学生の食いつきが違う」ことから、ESP¹³志向の重要性についても示唆があった。

一方、英語以外の諸言語の講師陣からは、各言語 1 名ずつの担当のためコンテンツ調整の手間はなく、初学者が大半であるため学力差の問題は生じないが、各言語の入門クラス（初級 I）のみ受講者が非常に多くなりがちである¹⁴、等の所見と、一つの言語を 2 年間継続して履修するよう誘導するカリキュラム上の要望が示された。

また、履修言語を問わない全体的な印象としては、本学学生の真面目な気質に驚く声が多い一方で、（どこの大学でも起こっていること、との但し書き付きで）大学の授業を受けるにあたっての学生の作法についての意見があった。

筆者を除き語学部門唯一の専任教員である西村太一教授（フランス語）からは、上記に同意するコメントと共に、開学以来のカリキュラム改訂の経緯についての証言があり¹⁵、英語と英語以外の外国語については取り扱いを分ける必要があるとの所見が示された。

筆者自身の所見は以下のとおり。すなわち、本学においては、学生の語学力・興味の対象共にバラツキが極めて激しいため、全体の底上げを行う仕組みと、学部生・大学院生の個別のニーズ（卒展作品での使用、研究発表の英文 abstract、その他）に対応する仕組みのそれぞれを整備する必要がある。

以上を受けて学長より、デザイン教育研究センター語学部門（西村・岡村）に対し、「更に学生のニーズに応え興味を持たせる方向での英語科カリキュラム再構築作業の

続行」「英語とそれ以外の外国語の関係性の再検討」等につき諮問がなされた。

2-2 デザイン教育研究センター語学部門としての取り組み

前節の学長諮問に基づき、筆者は関連領域の同僚教員と語らって予備調査としての学内共同研究を企画したが、「本件はむしろデザイン教育研究センターの本来業務として実施されるべき」との判定により、筆者を代表とする学内共同研究としての採用に替えて、センター予算による調査・試行が一部認められた。

当該研究は本学における語学教育・基礎教育についての充実・改善に関する予備調査を意図したもので、複数のプロジェクトについて調査・試行を行い、実現性の高いものから順次、授業への導入・カリキュラム反映への提案を目指すと共に、試作教材の製品化等も試みたいと考えていた。検討項目としたプロジェクトは以下のとおりであった。

（前段階として）

- ① ★開学当初からの語学教育方針やカリキュラム全体の中での位置づけについての総括
 - ② ★英語教育・外国語教育についての学内外への質問紙調査・ヒアリング等
- （①②を踏まえて）
- ③ 語学教育カリキュラムにおける英語と諸外国語の関係性の再検討
 - ④ ★基礎教育全体の中での語学教育の位置づけについての検討
 - ⑤ ★大学院教育との連携の視点から語学教育のあり方について検討
- （「芸工大らしさ」を生かした教授法・教育ツールの導入可能性探究（主に英語））
- ⑥ ◆「KDU フラッシュカード（仮称）」（学生のイラストを活用したパターン学習教材）試作と試行授業
 - ⑦ ◆「ニホン英語」的アプローチ（error-tension free な環境重視）を採り入れたリメディアル授業の試行

- ⑧ ▲e-ラーニングプラットフォーム「Moodle」による
e-learning 導入可能性の探究
- ⑨ ▲ビジュアルイメージを重視する学習法・思考整理法
(マインドマップ等)の導入可能性の探究
(英語・外国語教育カリキュラムの更なる精緻化・「見える化」を目指す手法の導入可能性探究)
- ⑩ ▲CEFR (外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠)¹⁶の評価基準活用の研究
- ⑪ ▲カリキュラムの「見える化」を支援する手法(コンセプト・マップ、到達目標型教育プログラム等)の探究

現状で上記の①②④⑤の★4項目については既に筆者が着手済みで、過年度の拙稿並びに本稿にて言及している。

また⑥⑦の◆2項目については、本稿執筆の時点では末延教授を中心に取り組んでいる(3章を参照)。

⑧⑨⑩⑪の▲については、筆者が関連学会に参加・資料を収集・ソフトを導入するなどして検討を始めている段階である。その他の項目とあわせて、今後順次着手していきたいと考えている。

3 基礎教育における英語力の位置づけと

「ニホン英語」的アプローチ

(おことわり)

本章の論述にあたっては、本学の末延岑生講師(非常勤:総合英語、兵庫県立大学名誉教授)の、2011年6月29日に本学で開催されたFD研究会での講演「英語教育をデザインする」の内容に加えて、本稿と同時に2011年度本学紀要に投稿予定の「Open Japanese (ニホン英語)をデザインするー神戸芸術工科大学における英語教育の実際」(以下「末延論文」)の草稿を参照しているが、末延論文については執筆が本稿と同時進行のため、引用部の表現等は最終稿とは異なる場合がある。

なお、「ニホン英語」と大学英語の融合の可能性については、前号論文(岡村2010)3章でも論じているので併せてご参照いただきたい。

3-1 「英語公用語」時代の「ニホン英語」

日本における英語公用語化論、あるいは国語英語化論は、明治維新の直後から¹⁷繰り返されてきた議論であるが、2002年に文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」¹⁸、続く2003年に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」¹⁹を打ち出し、2008年には2011年度からの新学習指導要領²⁰で小学校高学年に外国語活動(実質的には英語教育)が導入されること、高等学校の英語の授業を原則英語で行うことなどが定められ、大きな議論を呼んだ。

そして2010年に「ユニクロ」ブランド衣料メーカー、ファースト・リテイリングとインターネット通販の楽天が相次いで「社内公用語」を英語化する方針を打ち出すに至った。受け止め方は人それぞれながら²¹、ごく普通の会社員がある日突然「英語の壁」に直面することが当たり前になる時代となったことは疑いないであろう。

そのような時代に誰もが英米(日本の英語教育においては特にアメリカ英語)ネイティブスピーカーレベルの流ちょうな英語を話すことを目指すことは、不可能だけでなく「学習者を萎縮させ上達を阻む」という意味ではむしろ有害ということにもなりかねない。

2010年7月3日には、日本「アジア英語」学会(JAFAE)²²の第26回全国大会が、英語系学会としては開学以来初めて神戸芸術工科大学で開催され、末延が「日本の個性ーニホン英語」と題した基調講演を行った。

末延が唱道してきた「ニホン英語」的な発想は、海外では「世界諸英語」(World Englishes)等と呼ばれ、日本でもインド英語・シンガポール英語などが知られるものの、「ネイティブ英語(特にアメリカ英語)の模倣」を至上の価値とする日本国内、特に教育現場では異端視されてきた。

ユニクロ・楽天の例に見るがごとき企業での英語公用語化の流れは、「ニホン英語」(とその唱道者として長年英語教育界で異端児とされてきた末延²³)の再評価をものは避け難い「時代の必然」として求めるものであるが、上記の経緯により、教育現場で豊富なノウハウと経験を

持つ教員は極めて少なく、学術論文レベルでの先行研究もない。末延教授の「名人芸」を「見える化」し、本学を拠点として世に問うことは、教育的にも社会的にも大きな意義を持ち得る。2・2で紹介した構想に「ニホン英語」的アプローチ（error-tension freeな環境重視）を採り入れたリメディアル授業の試行を組み込んだ所以である。

3-2 「ニホン英語」と大学英語の融合の可能性

末延は、担当する本学「総合英語」受講学生120名に対して質問紙調査を実施し、本学学生の英語に対する意識として、

- 120名全員が「自分の英語に自信がない」
- 64.7%が「英語が嫌い」
- 95.9%が「自分自身の英語が嫌い」
- 67.2%が「日本人の英語は下手」
- 76.4%が「英米人の英語はカッコいい」
- 30.9%が「英米人のようにペラペラとうまく話せるようになりたい」
- 39.0%が「日本的な英語でいいから、せめて意味が伝わればいい」

と考えているとの結果を得た（下線部は筆者）が、筆者自身が学期始めに受講学生に書かせている「自己紹介カード」の自由記入欄にも同様の傾向が看取される。

ここで末延は「本学に限らず日本の学生たちの多くは、本来決して英語ができないのではなく、それ以前に”ネイティブの英語をそっくりそのまま真似ること自体をためらい、あるいは嫌悪”しているのではないか」との仮説を立てる。（アメリカ）英語を模倣することを絶対視する戦後日本の英語教育政策と、エラーを一切許容せず、「正しく」できないなら話すな・書くなと言わんばかりの教授法は、末延が折々に痛烈に批判してやまないところであるが、56名の学生に「人のことばをそのまま真似ることは好きですか」との質問に75%の学生が「嫌い」と応えた結果を受けて、「『方言芸術(dialect art)としてのニホン英語(Open Japanese)を学ぶ方向に向けさせる』ため

の英語授業のデザイン」を、本学における「ニホン英語」的アプローチの大目標とした。前号論文（岡村 2010）3章でも紹介した、母音をはっきり発音し聞き取りやすく、語法的にも省略の多い英米英語より冗長度が高く丁寧な「ニホン英語」の、英米英語を上回る理解率の高さをもって、末延は英語を異物であり模倣する対象としてではなく日本の国際社会に向けた「開国のための母語」と考えるべきとし、故に English と呼ばず”Open Japanese”と呼びたいとしている。

ここで比較のため、一見「ニホン英語」の発想と類似の、しかしより整然とした体系をもつように見える「英語」として、ジャン＝ポール・ネリエールが提唱したグロービッシュ Globish を紹介する。

2011年に和訳書が発売されたことにより²⁴俄然注目を集めているグロービッシュであるが、「単語は1500語とその派生語だけ」「文章は短く、15語以内に」「発音よりも、アクセントに注意せよ！」を原則とし「『完璧な英語』から『伝われば十分』へ」を目指す（以上和訳書帯より）ものの、英米のメディアからは「ネイティブにはわからない、通じない」と酷評されてしまっている。²⁵

この点、到達率では妥協することなく自然体で話すことを意識することで、日本人にも親しみやすいコミュニケーション・ツールを目指す「ニホン英語」の思想は、個性を重んじるアーティスト気質だけでなく、「世界をデザインする」本学の目標にも合致すると言えよう。

3-2 「KDUフラッシュカード（仮称）」と授業法

ニホン英語の再評価についての仔細な理論的裏付けはパイオニアである末延教授の論文に譲り、ここでは2・2で紹介した構想に含まれ、現在試作中の「KDUフラッシュカード（仮称）」について紹介する。

現在末延教授にご担当いただいている「総合英語」初級クラスで、末延が学生と共に制作している「KDUフラッシュカード（絵カード）」は、「末延式教授法」の特徴であるパタン・プラクティスを本学学生のレベルや嗜好に合わせて行うために最適化したツールである。

パタン・プラクティスとは、1つまたは1組の問題の型

（パタン）を使って素早く行う口頭練習で、教師が提示したパタンを素速く発話することで、「1回の授業の中で、500から、多いときには千数百もの英文を繰り返し口にし、あるいは作文する」（末延論文）ことを通じて、文型を学習者の中に習慣として確立することを目指すものである。

末延式のパタン・プラクティスは、

- ターゲットの文型として中学から高校2年生程度のレベルの構文を100選び出し、半期で消化可能な分量を更に抽出する。
- 「動詞＋名詞」のカード約1,500枚、「形容詞＋名詞」のカード約300枚を作成する。組み合わせを学生に与えて、学生が作画するのである。
- 加えて、ターゲット文型を元に、それぞれ8枚の自由文とそのカードを作成してもらう。
- これらを使って、百人一首風のゲームを行う。そのためのゲーム板になるパノラマも学生が描いてくれた。

というもので、学生自らが選んだ素材と自ら描いたカードを使用し、またゲーム形式でパタン・プラクティスを行うことで、必要ではあるが機械的な退屈さに陥りかねない反復練習を、楽しく飽きずに続けることを可能にしている。

現在は試作版として学生のイラストをコピーして作成しラミネート加工したカードで行っているが、将来的には、各学科にも協力を依頼して、内容（例文）選択・イラスト（装丁）のブラッシュアップを続け、マニュアルを整備して学内外で利用可能な教材にすることを目指したい。

「芸工生の描いたイラストによる英語教材」は、監修者として参加する末延教授の存在と合わせて、極めてユニークなものになるであろう。

3-3 今後の課題

前節までは「ニホン英語」と大学英語教育との融合の可能性を優先して論じたこともあり、内容的に初級・中級の学生を対象とした授業にかかる事項が多かった。本節では

これを補うものとして、上級クラスも含めたより全体的な視点から、今後の課題について検討する。

3-3-1 「多少の緊張感を持たせた」環境でのトレーニング

前節までで論じた「ニホン英語」的アプローチは、いかに学生に **error-tension free** な環境でのトレーニングを積みませるか、そしてその実践においては「型」を叩き込むパタン・プラクティスを重視している旨述べた。「言い換え練習」の類は筆者も英語演習B（英作文）のうち、基礎文法の復習を重視するクラスなどでは徹底的に行うところである。

一方、「多少の緊張感を持たせた」環境でのトレーニングは、今後の課題である。

筆者はこれまでに **Output** 能力向上の試みとして、授業時間内においては「旅行英語」（英語演習）の時間に、授業で履修した会話を、ペアを作りアレンジを加えて再現させる寸劇型の期末試験（岡村2010: 4-3）や、課外活動の指導として自らの社会起業プロジェクトの成果を競う **SIFE Japan** 大会に出場する学生グループの英語プレゼンテーションの指導（岡村2009: 5-2）等を行ってきた。

本学英語科全体としては、「英語コミュニケーション」のクラスで、ネイティブスピーカーの指導によりスピーキングとロールプレイを重視した授業が行われている。

また、**Input** 能力向上の試み（岡村2010: 4-2）として筆者が今年度も行った、時事問題に関する新聞記事を初見でどこまで読みこなせるかの試みである「『ボクにも読めた』 **Wall Street Journal**」として、2011年度前期はカタルーニャ国際賞授賞式典でのスピーチで日本の原子力政策を批判した村上春樹の記事²⁶を速読させたが、訳読型のスタイルで内容を確認した上で、特に上級クラスにおいては、内容把握に加えて村上の発言や日本の原子力政策をどう思うかについて学生にコメントさせた。比較のため筆者が担当する総合英語の中級クラス3コマ（総合英語Ⅰ：2コマ、Ⅱ：1コマ）と、上級クラス（総合英語Ⅰ）1コマ、並びに時事英語（英語演習C）のクラスで同一の記事を試したが、「時事英語」のクラスを受講していたヨーロッ

パからの留学生は「別格」として²⁷⁾ 上級クラスでは「抜き打ち」でもある程度英問英答が成立した。後期は 2010 年度同様クラスを 2 分割して 1 クラス当たりの受講者数が前期より少なくなることが見込まれることもあり、自らの制作物を英語で説明させるなど、より長い時間のプレゼンテーションの課題を課すことも検討したい。

なお学部英語教育と大学院教育との連携については 4 章で論ずるところであるが、2011 年度は大学院総合プロジェクト枠で初の試みとして、プレゼンテーションを最重要視した「『芸工英語村』プロジェクト」を立ち上げ、後期に自らの研究テーマ等について英語でプレゼンテーションするトレーニングを行う予定である。「ニホン英語」の精神も採り入れ、「コミュニケーション・ツールとしての英語の使い方については大らかに、しかしコンテンツの質は高い」ものを目指す指導を心がけたい。

3-3-2 「まとめる力」のトレーニング

本稿執筆にあたり、同僚教員からは「書く力」の鍛錬の重要性についても指摘を受けた。大学院「アカデミック・リテラシー」における取り組み（あるいは試行錯誤）の例については 4 章で述べるが、学部生についても、特に中上級クラスでは教材として採り上げトレーニングしてほしいとの希望が寄せられている。

現在「総合英語」中上級で使用されているテキスト²⁸⁾は、その科目分類が示すとおり 4 技能「読む・聞く・話す・書く」を総合的に訓練するという目標に基づき編集されている。

特に上級用のテキストについては、設問としても **Short Essay** を書いてみるよう求めるものがあり、筆者もそのいくつかを時には授業時間内に書かせ、また宿題として提出させたり、授業で採り上げたいいくつかのうち一つを期末試験に必ず出題する、と予告して準備させたりもする。

大学院生に対しては自らの研究テーマを英語で簡潔にまとめて書き出し、また説明できるようになることを求めているが、学部「総合英語」は受講者の大多数が 1 年生であり、説明しようにもまだ自分自身「どんなことがしたい」のか定まっていない者が少なくないのが実態である。

それでもテキストが採り上げるような時事問題的な性格が強いトピックであれば筆者にも対応可能であるが、卒展作品の概要や、大学院の院生発表用の梗概など、アート & デザインに直接関わってくる内容の文章を添削しようとすると、まず学生が提出してきた文章に目を通し、意味が通らなかった部分は本人に連絡して「それはこういうことか」と確認をしてみたときに、「ちょっと違うなあ」という反応になってしまったときに最も難しく、筆者自身「英語でアートを語れる」サポート役の必要を痛感させられることになる。このあたりの作業を徹底して行おうとすれば学生ごとに個別に対応するしかなくなるのも、5 章に論じた「サポートステーション」の必要を強く感じる所以である。

これについては、2011 年度後期に、教職課程を受講する学生から、教員採用試験の英語で判らなかつたことについて個別に指導してほしいとの希望も受けており、こういったニーズへの対応も合わせて、体制を整備していく必要は、今後ますます拡大していくであろう。

3-3-3 e-learning の活用と

ソーシャルネットワーク

英語に限らず、というより外国語の問題ではなく日本語運用も含めたコミュニケーション能力の鍛錬全体の問題として、その鍛錬を行うには 90 分×15 回（Ⅰ・Ⅱを通年で履修した場合でも 30 回）では全くの不足であると筆者が感じていることは、過年度の拙稿でも「英語（語学）以前の問題」として繰り返して論じてきたとおりである。また、学部においてプレイスメント・テストに基づく 3 レベルのクラス分けを実施した現在においてなお、クラス内の言語運用能力に差が残っていることも同様であり、これは続く 4 章にて報告した大学院においても変わらない。

このため、学生個々のニーズにより密着した指導を実現するために、オンラインにおいては 2-2 でも採り上げた **Moodle** をはじめとする e-learning の導入なども検討している。同僚教員からは高名な「ロゼッタストーン」²⁹⁾等のオンライン学習環境を奨める意見も上がったが、さすがに全学生に奨めるには高額すぎ³⁰⁾、また後述するアクティブ

な学生ネットワーク者達においても自宅には十分に強力なPC環境がなく携帯電話ないしスマートフォンからインターネットにアクセスしている者も多いため、現実的な解であるとは言えない。

「えいご漬け」³¹などが有名なニンテンドーDSのシリーズなどのゲーム機³²については、大学教育における活用についての先行研究もあるが³³、ハードウェアの普及率を考慮するなら、今や全学的な導入を考えるならDSなどの独立したゲーム機よりも、PC/スマートフォン/携帯電話に対応できるe-learningプラットフォームを学内に導入するか、本学のニーズに対応可能なサービスを提供するASP (Application Service Provider)と契約を結ぶ方が学生の活用率は高くなると考えられる。

筆者はこれまでも授業オリエンテーションの際にNHK英会話の関連サイト（「リトル・チャロ2」³⁴、「ニュースで英会話」³⁵等）ほかを学生に勧めてきたが、ハードウェア環境並びにコンテンツの嗜好面においてより学生のニーズに近いものを探っていくのが今後の課題である。

合わせてソーシャルメディア（Twitter, Facebook等）のより積極的な活用を図っていくことも必要である。東日本大震災直後から、災害情報の伝達・拡散に果たしたTwitterの役割は絶大なものがあり（参考文献の関連項目参照）、またそれが更に利用者の増加を加速して現在に至る。

筆者は過去に所属NPO (JAFSA (国際教育交流協議会)のネットワーク担当としてWebmasterとメーリングリスト群の管理を兼務していた時代に、SARS発生に伴い学生交流担当者が恐慌状態に陥りかけた2003年春から夏にかけて、海外ニュースサービスなどの情報を整理して会員に提供する、昨今言われる「キュレーション」³⁶のひな形的な業務に携わったことがある。

東日本大震災以後、筆者は震災以前より「阪神・淡路大震災の記憶を共有し、命の尊さや絆の大切さを学び、未来へつなげていく」活動をしている本学かわいひろゆき教授とゼミ生を中心とする「ヒトキズナ+ぷろじえくと」³⁷に合流して、「はるかのひまわり」を通じて1.17と3.11をつなぐ「ひまわりんく」³⁸のメンバー等に震災や支援ボ

ランティア関連の情報を収集して提供したが（継続中）³⁹、この際にも国内外メディアの情報も含めて情報入手をTwitterに大きく依存している。

結果として本学教職員・学生とのTwitter/Facebook上でのやりとりも急増し、学外に対してだけでなく学内におけるコミュニケーションも大幅に改善され、英語教員としての「つぶやき（ツイート）」を数百人単位の「フォロワー」を持つ学生が友人達にリツイート（転送）してくれることも増えている。学科教員だけでなく事務局にも在学生・卒業生とのソーシャルネットワークの構築と対話に積極的なスタッフがおられ、今後の有機的な関係強化が期待される。

上記は学生にとっては特段に珍しい話ではなく、大学での活用においても、例えば授業中におけるTwitter利用の功罪についての議論にも先行事例が存在する⁴⁰。教科に直接関連した部分だけでなく、5章にて論ずる学生支援への応用においても、Face-to-Faceでの関係構築を補完する有力なツールとなっていくであろうし、筆者としても積極的に活用していきたいと考えている。

4 大学院教育との連携

ここでは、学部英語教育と大学院教育との連携についての現状と課題につき、筆者が関わった二つの事例から検討してみたい。なお前章3-3-1で2011年度に実施予定の新規企画につき説明しているので併せて参照されたい。

4-1 「アカデミック・リテラシー」における 試行錯誤

筆者が「プログラムマスター」（講座担当者代表）を務める「アカデミック・リテラシー」は、「演習形式で、論文執筆（日本語・英語）の基礎とプレゼンテーションの作法を学ぶことを通じて、研究者として求められる発信力を身につける。必要な情報を正しく引証しつつ、その成果をoutputするための作法を学び、自らの研究の意義を日本語・英語で表現できるアカデミック・スキルを養」うことを意図した大学院修士課程基幹科目である。

（以上2011年度前期シラバスより⁴¹）

シラバス作成時には、主に日本人大学院生を想定し、筆者が日本語・英語の論文作法につき基礎的事項を講じた上で、プレゼンテーション作法を担当する鈴木明教授の回につながり予定であった。

実際には、日本人大学院生に加えて国費留学生（両名ともヨーロッパ出身だが母語は英語ではない）2名が履修登録したため、「英語に苦手意識のある日本人大学院生」と「英語では流ちょうに会話でき、日本語でも日常生活レベルの会話はできるが、専門書を読むには苦勞する留学生」の混成クラスに対して、文字どおりシラバスを「破り捨てて」の試行錯誤を余儀なくされた。

「アカデミック・リテラシーはあくまでアカデミック・リテラシーを養うためのクラスであり、『日本人学生のための英語教室』でも、『外国人留学生のための日本語教室』でもない」という大原則を堅持するべく、講義は日本語と英語のミックスで行い、テキストも日本語訳のある洋書を急遽取り寄せ、両方を行き来しながら解説する形式で数回実施したものの、やはり無理が生じたため、最終的には平易な英語で書かれたアカデミック・イングリッシュの教科書を使用して講義した（使用テキストについては文末の参考文献の該当項目を参照）。

当該講義最後の3回は2010年度同様特別講義とし、台風上陸による臨時休講で日程が狂うなどのハプニングがあったものの、2回はネイティブスピーカーによる“Introduction to Academic Writing”＝（今回は完全に英語での）アカデミック・ライティングのおさらいを実施し⁴²、最終回は前年度同様、末延教授による特別講義「ニホン英語のすすめ－研究者として生き残るために」で元気づけて送り出した。

授業の連続性を維持するため、特別講義を含むすべての担当者に岡村が使用したテキストを提供しご一読いただいた上での授業を依頼したが、特に「ネイティブ回」は筆者の授業が丸ごと「予習」となったため、「全部英語」の授業が初体験だった日本人院生達も比較的容易に聞き取れたとの感想だった。

上記の経験は、特に学内からの大学院進学を希望する学生の英語力をどのように強化するかと、日常生活に必

要な程度の日本語力は獲得しつつも、研究に必要なコミュニケーション力にはまだ不足感が否めない大学院留学生をどのようにサポートしていくかという、二つの問題を提起していると言えよう。次年度以降は、日本人学生と留学生向けに、それぞれ「別メニュー」を用意する選択も含めて、運営を再検討する必要があると思われる。

4-2 KDU 大学院留学生キャンパスガイドの作成を通じて留学生のニーズを把握する試み

2章でも述べたとおり、多数の留学生を擁する神戸芸術工科大学であるが、日本語によるコミュニケーション能力が不足しがちな留学生が、大学のリソースのすべてを有効に活用できていないのではないかと疑いの声と共に、「次世代の大学院留学生のため、より快適なキャンパスライフが送れるように、（英語による）大学院留学生用キャンパスガイドを作成したい」との申し出が、留学生側から2010年6月にあった。

これを受け、筆者を含む大学院生2名と専任教員3名（相良二郎教授・佐久間華助手・岡村）の有志によるワーキンググループにて、2011年度の新留学生に配布するキャンパスガイド *Guide for International Research & Graduate Students* を作成、2011年度入学の大学院留学生に配布した。

詳細については別途刊行予定の報告論文に譲るが⁴³、作成の過程で行われたミーティング、聞き取り調査、ブレインストーミングなどを通して、「日本のデザイン・芸術系大学における「研究」の定義が留学生の母国のそれと必ずしも一致しない」など、学内の異文化間コミュニケーションをめぐるいくつかの課題が明らかになった。

次年度以降の大学院留学生サポートの課題とすると共に、成果物であるキャンパスガイドについて、学部レベルでの教材として利用するなどの可能性も含めて、活用法を検討していきたい。

5 成人発達障害当事者支援活動と学生支援への応用

大学教員として期待される社会貢献活動の一環として、筆者はNPO法人発達障害をもつ大人の会(DDAC)⁴⁴ から

の要請を受け、2010年12月より運営委員、2011年3月より理事を務めている。

発達障害といってもLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症・アスペルガー症候群などその態様はさまざまであり、行動への現れ方も千差万別である。しかし他者の視点に立って考えることが苦手と言葉を字義通りに解釈しがち（空気が読めない）などの困難を有することは共通している。このため他者とのコミュニケーションがうまく取れず、その結果多くの場合は二次障害（自尊心の低下や無力感から引きこもりや抑うつ、様々な衝動的・攻撃的行動など）を抱えることになる。

当初発達障害は、当事者が年を重ねるにつれ、例えばADHDの多動性が目立たなくなるなど、障害は軽くなっていくものと考えられていたが、現実には成人してもなおさまざまな特性は残り、二次障害に苦しむ当事者は少なくない。そして少子化の時代ではあるが、当事者の人数はむしろ増加する傾向にある。

大学をはじめとする高等教育機関も例外ではなく、2005年から日本学生支援機構が実施している「障害のある学生の就学支援に関する実態調査」（発達障害が調査対象になったのは2006年度から）でも、当事者学生の在籍比率は顕著に上昇する傾向にある。国公立の大学・短期大学・高等専門学校約1,200機関に対する調査の結果、調査対象学生数約320万人のうち、診断書を取得して高等教育機関から支援を受けている者は2006年の127名から、2009年には569名に増加した。また、診断書の有無を問わず、発達障害があるまたはあることが推察されるために教育上の配慮を行っている者は、2008年には814名だったものが、2009年には1,378名へと急増している。⁴⁵

筆者は2011年度で本学勤続5年目になるが、本学で授業を行っていても上記の増加傾向は看取される。⁴⁶

ただし芸術系大学の場合、DDACが大阪府から受託した「重点分野雇用創出基金事業 大阪府社会人ピアワークサポート事業」（発達障害等により働きにくさを抱えるニート状態にある若者に対して、困難性を理解し合える

「社会人ピアワークサポーター」の協力を得て、職業的自立に向けた支援を実施する（同事業公式Webサイトより⁴⁷）の事業報告会（2011年3月13日開催）で行われたパネルディスカッションのタイトルが「ピカソだって、アインシュタインだって、ボクだって…」であったように、歴史に名を残した大科学者・大芸術家に発達障害当事者は多いというのが通説となっている。生きづらさを抱える学生が「居場所」や「やりたいこと／仕事」に恵まれることで「化ける」可能性が、芸術系大学では他の領域より高いはずであるというのが筆者の意見であり、DDACに参加した理由でもある。⁴⁸

筆者は前号論文（岡村2010:4-4）で、基礎学力に関する「英語以前の問題」（岡村2010:5章）を含む学生の幅広いニーズに対応するため、学内各部署の連携を更に強化するだけでなく、「少なくとも日本語と英語について、学生の情報収集・整理と理解・発信の個別ニーズに対応した指導助言を行うスタッフが常駐するサービスの必要性」を論じたが（岡村2010:4-4-2）、カウンセリングルームが2011年度から「友達を作ろうワークショップ」をはじめたことなども考えると⁴⁹、（リメディアル）教育の補完機能だけでなく学生相談機能も有する「（よらず）駆け込み寺ワンストップ型」のサポートステーションの整備が必要となる日が、遠からず訪れると思われる。

教員・職員・学生たち自身だけでなく、学外の専門家や関連団体の力も借りて、すべての学生が「世に役立つ人物」⁵⁰として社会に胸を張って巣立っていく環境作りを目指して努力を続ける必要がある。

おわりに

筆者はもともと国際関係論・国際政治学専攻なのであるが、留学を機に大学行政管理職員として国際交流畑に足を踏み入れた後に大学院に復学、次いで国際教育交流系NPOの業務に従事し、しかる後に英語教員として現職に就き、更に成人発達障害当事者を支援するNPOの役員に就任した人間である（まんが・アニメに係る専攻を擁する大学に奉職する「おたく」でもある）。このように並べると自らの専門に一貫性が感じられないのであるが、

例えばクリントン政権の米国家情報会議議長・国防次官補を歴任したジョセフ・S・ナイが、21世紀の国際社会を制する「パワー」の重要な要素として挙げる「ソフト・パワー」⁵¹の源泉として日本の「クール」なポップカルチャーが評価される（角川歴彦本学客員教授⁵²）ように、筆者本人の感覚としてはすべてがどこかでつながっている。

同様に、今回本稿で報告した論じた諸相は一見それぞれ独立した別の問題であるが、そのつながりを「見える化」し、学生諸君を更に強力にサポートするための仕組みを作るための手がかりとすることが、本稿のいわば「裏テーマ」であった。これについては、本稿にて報告した試みを含むこれからの実践の中で得られるであろう知見、さらに浮かび上がるに違いない課題と共に、今後とも考察を続けて行きたい。

本稿並びに今後の展開に引き続きご意見を賜れば幸いである。

謝辞

今回も、本稿における論考、そしてその前提となる英語科諸科目の運用について、「総合英語」をご担当ただただだけでなく、新教材の開発などにも意欲的に取り組んでいただいている末延岑生講師（兵庫県立大学名誉教授）ほか英語科非常勤講師各位と、語学部門の先任である西村太一教授ほかデザイン教育研究センター教員各位、また大学院「アカデミック・リテラシー」の運営補佐並びに「KDU 大学院留学生キャンパスガイド」作成プロジェクトの教員側実務を担当された佐久間華助手ほかの皆様と、教学課を中心とする事務局各位から、貴重なご指摘や、運用面におけるご協力をいただきました。

以上に加えて、試行錯誤を続ける筆者に公式・非公式を問わずご助言と激励をいただいたすべての教職員・関係者各位と、筆者の英語授業・大学院「アカデミック・リテラシー」の授業などを受講、あるいは個別指導の機会を持つ中で、アンケートやヒアリングに限らずさまざまな意見を寄せてくれたすべての学部生・大学院生諸君にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

（前号までの紀要掲載論文）

岡村光浩、「神戸芸術工科大学における英語教育についてー現状と展望」、『芸術工学 2009（神戸芸術工科大学紀要）』、2010年、

<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/thesis/07-01.html>、最終アクセス日 2011年7月30日

岡村光浩、「初年次教育・基礎教育についての一考察ー神戸芸術工科大学における英語教育を中心に」、『芸術工学 2010（神戸芸術工科大学紀要）』、2010年、
http://kiyou.kobe-du.ac.jp/wp-content/uploads/2010/11/4_okamura.pdf、最終アクセス日 2011年7月30日

（「末延論文」）

末延岑生、「Open Japanese（ニホン英語）をデザインするー神戸芸術工科大学における英語教育の実際」、未刊行（2011年度本学紀要に投稿予定の草稿）、2011年

（2-1 ESP 関連）

寺内 一ほか編、『21世紀のESPー新しいESP理論の構築と実践』、大修館書店（英語教育学大系第4巻）、2010年

福井希一ほか編、『ESP 的パイリンガルを目指してー大学英語教育の再定義』、大阪大学出版会、2009年

（2-2 CEFR 関連）

マリア・ガブリエラ・シュミットほか編『日本と諸外国の言語教育における Can-Do 評価ーヨーロッパ言語共通参照枠の適用』、朝日出版社、2010年

矢野安剛ほか編、『英語教育政策ー世界の言語教育政策をめぐって』、大修館書店（英語教育学大系第2巻）、2011年

Council of Europe, Council for Cultural Co-operation, Education Committee, Modern Languages Division. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.

（邦訳：吉島茂ほか編訳、『外国語教育Ⅱー外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、朝日出版社、2004年）

Morrow, Keith, ed. *Insights from the Common European Framework*. Oxford: Oxford University Press, 2004..

（3-1 「英語公用語化」 関連）

江利川春雄『英語教育のポリテイクスー競争から協同へ』、三友社出版、2009年

大津由紀雄編著、『危機に立つ日本の英語教育』、慶応義塾大学出版会、2009年

鳥飼久美子、『「英語公用語」は何が問題か』、角川書店（角川 one テーマ）、2010年

（3-1 「ニホン英語」・「世界諸英語」 関連）

末延岑生、『ニホン英語は世界で通じる』、平凡社（平凡社新書）、2010年

本名信行編著、『事典 アジアの最新英語事情』、大修館書店、2002年

本名信行、『世界の英語を歩く』、集英社（集英社新書）、2003年

Honna, Nobuyuki. *English as a Multicultural Lanugage in Asian Contexts*. Tokyo: Kuroshio Publishers, 2008.

Kirkpatrick, Andy. *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

Murata, Kumiko, and Jennifer Jenkins, ed. *Global Englishes in Asian Contexts*. Houndmills, UK: Palgrave Macmillan, 2009.

Suenobu, Mineo. *Errorology in English*, Kobe: Yugetsu Shobo, 2002.

(3-2 パタン・プラクティスその他の英語科教授法関連)

望月昭彦編著、『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』、大修館書店、2010年

山岸信義ほか編、『英語授業デザインー学習空間づくりの教授法と実践』、大修館書店（英語教育学大系第11巻）、2010年

(3-3 東日本大震災とソーシャルメディア関連)

『思想地図β』vol.2, コンテクチュアズ、2011年

小林啓倫、『災害とソーシャルメディアー混乱、そして再生へと導く人々の「つながり」』、毎日コミュニケーションズ（マイコミ新書）、2011年

立入勝義、『検証 東日本大震災 そのときソーシャルメディアは何を伝えたか？』

(4-1 大学院「アカデミック・リテラシー」テキスト)

Allen, Kathryn L. *Study Skills: A Student Survival Guide*. Chichester, UK: John Willy, 2005. (邦訳：伊藤佑子ほか訳、『スタディスキルズー卒研・卒論から博士論文まで、研究生生活サバイバルガイド』、丸善、2005年)

Day, Robert A.. and Barbara Gastel. *How to Write and Publish a Scientific Paper*. 6th.ed. Westport, CT: Greenwood Press, 2006. (邦訳：三宅成樹訳、『世界に通じる科学英語論文の書き方ー執筆・投稿・査読・発表』、丸善、2010年)

Swales, John M. and Christine B. Feak. *Academic Writing for Graduate Students*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 1994. (邦訳：ジョン・スウェイルズ、クリスティン・フィーク、『効果的な英語論文を書くーその内容と表現』、大修館、1998年)

慶應義塾大学経済学部英語部会、Study Skills for College English. 2nd ed. 慶應義塾大学出版会、2011

年

(5 大学生の発達障害や生きづらさ関連)

井出草平、『ひきこもりの社会学』、世界思想社、2007年

パトリシア.O.クインほか、『ADHD コーチングー大学生生活を成功に導く援助技法』、ハリス淳子訳、明石書店、2011年

佐々木正美、梅永雄二、『大学生の発達障害』、講談社（こころライブラリー）、2010年

アン・パーマー編、『発達障害と大学進学ー子供たちの進学の夢をかなえる親のためのガイド』、服巻智子訳、かもがわ出版、2007年

註・引用文献（Web サイトについては、特に記載のない限り 2011年7月30日に最終確認）

- 1 査読時に加筆した事項で出典が2011年8月以降のものについては、文末注にその旨記載する。
- 2 プレイスメント・テストには、2010年度同様 NPO 法人英語運用能力評価協会(ELPA)の ACE Placement を使用している。
- 3 2009年度及び2010年度に新入生向け「スタディスキルズ」の授業枠内で実施されていた「プレイスメント・テスト講評+α」の小講義（岡村 2009、1章参照）は、プレイスメント・テスト実施の趣旨が学生にも十分浸透し、またスタディスキルズで取り扱うべき事項が増加したとの判断により、2011年度以降は実施されていない。
- 4 ジョージ・トラスコットほか、『Eye on America and Japan (そのまま日米比較)』、南雲堂、2009年
- 5 初級・中級クラスの成績優秀者を若干名上位のクラスに編入するため、上級クラスは後期に前期より受講者数が増える傾向がある。このため2011年度後期もコマ数を増やして受講者数を抑える措置を執っている。
- 6 ジム・クヌーセン、小中秀彦、『Changing America (これからのアメリカ)』、南雲堂、2010年
- 7 中野洋子、ユークリア・ドネリ、『Living in Society: From People to Persons』、南雲堂、2011年
- 8 前期は350点、後期は500点到達を目標とし、英語科による周知協力もあって、各期30人程度が受講している。
- 9 Cumulus, International Association of Universities and Colleges of Art, Design and Media.
<http://www.cumulusassociation.org/>
- 10 神戸市：デザイン都市・神戸
<http://www.city.kobe.lg.jp/information/project/design/>
- 11 参照：神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科、「国際ワークショップ WAT_Kobe2009 開催のお知らせ」、2009年11月20日～27日、
<http://www.kobe-du.ac.jp/env/2009/000463.php>
- 12 参照：神戸芸術工科大学プロダクトデザイン学科、「【展示会】プロダクトデザイン学科有志プロジェクト Design Soil お披露目会が開催されます」、2011年5月

25 日、

<http://product-kdu.blogspot.com/2011/05/design-soil-design-soil.html>

¹³ English for Specific [Special] Purposes=特定目的のための英語（に関する研究及び実践）、専門英語教育（あるいは研究）の意。参考文献の該当項目参照。

¹⁴ 言語により若干異なるが、最初のクラスである初級Ⅰで数十名いた受講者が、続く初級Ⅱでは10名前後、中級クラスでは一桁になるケースが珍しくない。

¹⁵ 特に、1996年度のカリキュラム改訂で語学全科目が半期開講に改められた（岡村 2009: 2-3）経緯について、鈴木成文・第2代学長（当時は副学長）との間で、「初学の言語が半期単位の履修では不足ではないか」との西村の意見に、「確かにそうだが、まる1年履修して失敗したとき学生がかわいそうだ」とのやりとりがあったとのこと。

¹⁶ CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)は欧州評議会(Council of Europe)が2001年に発表した言語能力の参照基準であり、6段階の言語運用能力レベルを「何をすることができるか」という「Can-Do 評価」で記述しており、自律的学習の指針としてEU域外でも注目されている。

¹⁷ 山井徳行、「国語外国語化論の再考—森有礼の『国語英語化論』と志賀直哉の『国語フランス語化論』について—」（Ⅰ～Ⅲ）、『名古屋女子大学紀要。人文・社会編』、2004-06年、Ⅰ

<http://libweb.nagoya-wu.ac.jp/kiyo/kiyo50/s-kj5017.pdf>

Ⅱ
<http://libweb.nagoya-wu.ac.jp/kiyo/kiyo51/jinbun/kojin/19yamai.pdf>

Ⅲ
<http://libweb.nagoya-wu.ac.jp/kiyo/kiyo52/jinbun/kojin/jinbun221-229.PDF>

¹⁸ 文部科学省、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」、2002年7月12日、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

¹⁹ 文部科学省、「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」、2003年3月31日、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04042301/011.htm

²⁰ 文部科学省『新学習指導要領・生きる力』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm

²¹ 英語も「一つのツールとして割り切る(p.6)立場の例として、森島秀明、『もし御社の公用語が英語になったら』、祥伝社、2011年。また『英語支配論』を『日本語の防衛』に結びつけた「過激な調子の反対論の例として、津田幸男、『日本語防衛論』、小学館、2011年、などを参照。

²² <http://www.jafae.org/>

²³ Wikipedia、「末延岑生」、
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AB%E5%BB%6%E5%B2%91%E7%94%9F>

²⁴ ジャン=ポール・ネリエール、デイビッド・ホン、『世界のグロービッシュ』、グローバル人材開発訳、東洋経済新報社、2011年。ほか Robert McCrum, *Globish: How the English Language Became the World's Language*. London: Viking-Penguin, 2010等を参照。

²⁵ 日向清人、「ネイティブにはわからない、通じない」、『日向清人のビジネス英語雑記帳』、2011年4月20日、
<http://eng.alc.co.jp/newsbiz/hinata/2011/04/globish.html>

²⁶ Kenneth Maxwell, “Murakami Slams Japan’s Nuclear Choice,” Japan Real Time – WSJ, June 10, 2011,

<http://blogs.wsj.com/japanrealttime/2011/06/10/murakami-slams-japan%E2%80%99s-nuclear-choice/>

²⁷ 2011年度前期は受講した留学生と日本人学生の語学力に大きな差があったためクラス運営にいささか苦心した感があり、遺憾ながら学生アンケートの満足度にもその印象が反映されていた。

²⁸ 注4並びに6を参照。

²⁹ <http://www.rosettastone.co.jp/>

³⁰ すべてのレベルに対応した「レベル1, 2, 3, 4 & 5セット」とオンラインサービス15ヶ月分の合計金額が¥49,800（<http://www.rosettastone.co.jp/english-us/> 2011年9月23日閲覧）

³¹ <http://www.nintendo.co.jp/ds/angj/>

³² <http://www.nintendo.co.jp/ds/>

³³ 森靖之、「ICTを利用した教育実践方法について」、『高松大学紀要』50, pp.115-128, 2008年、
http://www.takamatsu-u.ac.jp/library/06_gakunaisyupan/kiyo/no50/50_115-128_mori.pdf

³⁴ <http://cgi2.nhk.or.jp/charo-nclub/index.cgi>

³⁵ <http://cgi2.nhk.or.jp/e-news/index.cgi>

³⁶ 佐々木俊尚、『キュレーションの時代—「つながり」の情報革命が始まる』、筑摩書房（ちくま新書）、2011年などを参照。

³⁷ 参照：神戸芸術工科大学、「ヒトキズナ+ぷろじえくと」、2011年11月24日、
<http://www.kobe-du.ac.jp/2010/11/17497/>

³⁸ <http://visual.kobe-du.ac.jp/himawalink/>

³⁹ <http://goo.gl/JFfx98>

⁴⁰ 中原淳、「ツイッターで授業中つぶやくことは、『よい学習』なのか?」、2010年2月7日、
http://www.nakahara-lab.net/blog/2010/02/post_1648.html 2011年9月23日閲覧

⁴¹ <http://goo.gl/Ir2t>

⁴² マイルス・マッコーリ非常勤講師（学部「英語コミュニケーション」担当・神戸学院大学准教授）による。

⁴³ プロジェクトの詳細については、教員側実務の中心的存在であった佐久間大学院助手がまとめた報告論文（佐久間華、「プロジェクト：KDU 大学院留学生キャンパスガイドの作成を通じて留学生のニーズを把握する試み（仮題）」、未刊行・学外の学会誌に投稿予定の草稿、2011年）を参照させていただいた。

⁴⁴ <http://www.adhd-west.net/>

⁴⁵ 独立行政法人日本学生支援機構学生生活部特別支援課「奨学学生受入促進研究委託事業－障害のある生徒の進学促進・支援のための高大連携の在り方に関する研究」2011年3月、pp.5-6.

⁴⁶ DDAC 理事就任以来、筆者はこの領域についても授業や保健室（カウンセリングルーム）と連絡を取り合っているが、この認識は三者の共有するところである。

⁴⁷ <http://piasapo.com/category/jigyo>

⁴⁸ 岡村光浩、「芸術系大学と成人発達障害当事者会が連携することには意味がある（「ADHD の学生は創造性がより高い？」）」、ひろの雑記帳@神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター（筆者ブログ）、2011年3月25日、<http://hiro.intlcafe.info/item/3069>

⁴⁹ 岡村光浩、「【保健室・カウンセリングルームより】友達を作ろうワークショップ（5/31(火) 13:30-）」、ひろの研究室（の掲示板）@神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター（筆者の本学学生への連絡用ブログ）、2011年5月24日、<http://hiro.intlcafe.info/office/item/3109>

⁵⁰ 学校法人谷岡学園、「建学の理念」、

<http://www.tanigaku.ac.jp/profile/idea.html>

⁵¹ 当該国の（相手国で魅力的だと思われる）文化・（国内外いずれでも準拠していると認識されている）政治的価値観・（他国からも正当で倫理的に正しいと評価されている）外交政策。Joseph S. Nye Jr., *The Future of Power*. New York: Public Affairs, 2011, p.84.

⁵² 角川歴彦、『クラウド時代と<クール革命>』、角川書店（角川 One テーマ 21）、2010年、などを参照。